

混乱していた。そんなとき、妹がいきなり「ババ！」と叫び、父の腕にかぶりついたのだった。突然のことに病室にいた医者や看護婦、母も私も嘩然となった。妹は真剣に、ものすごい力で父の腕を噛んでいた。「何するの！止めなさい！」母が叫び、みんなで妹を父から離した。私は頭に血が上がり、妹の両肩をつかんで「なんてことするのよーばかーばかー」と罵声を浴びせながら激しくゆさぶった。妹は放心したようにただされるがまだだった。

その直後、父の心電図が乱れ、あつという間に父は帰らぬ人になってしまった。父の腕にはくつきりと妹の上下の菌型が彫られていた。なぜか私は夢の中でこの場面の再現をしていた。

終点の海老名駅に到着した気配にあわてて電車を降りたつと、十五年ぶりに訪れたあの辺鄙な海老名は蛹から蝶に孵化したかのような変貌ぶりだった。意気込んでここまでやってきたにもかかわらず、このあとどうすればいいものか頭は白紙状態だった。華やかな街並みにいささか圧倒されていた。

私はとりあえず駅前にそびえたつショッピングモールに向かい、テラス席のあるカフェでお茶することにした。一息つくとき昼の街は小さい子供をつれた母子や犬の散歩をする人など、平和な空気で満ちあふれていた。

私はネットで調べた海老名の情報のおさらいをした。市の木は「ツゲ」、市の花は「サツキ」、市の鳥は「カワラヒワ」……？少々バカバカしく思えた。だいたい「カワラヒワ」って何よ？そんな鳥知らないんだけど。手持ち無沙汰になり良案も浮かばないので、昨日から何度もダイヤルしている妹の携帯にまた電話をかけた。数回の呼出音の後「現在この電話は電波の届かないところにあるか、電源が入っていません」と予想通り同じメッセージを繰り返した。

しばらくカフェからの風景をなんとなく眺め、まったりとした時を過ごししていると、突然私の携帯が鳴った。「やだ、会社？」瞬間的に胃がチクリとした。しかし着信を確認するとそれは妹

からだだった。今度は胸がムカついた。

「もしもし」私は低い声を発した。「あ。お姉ちゃん？今どこ？」まるで待合せでもしていたかのような口調で妹が応答した。

「今どこって？！あんだ、あたし今海老名にいますだよ。母ちゃんは元気なんですよ。でもなんで母ちゃんを連れ出したのよ」「早くでまわしたてた。妹はいつも通りの落ち着いた態度だった。

「お姉ちゃん、よく聞いて。海老名駅からタクシーに乗って『さんせんこうえん』ってとこまで来て」妹は言った。

「さんせんこうえん？何それ？どこよ？」「『さがみさんせんこうえん』ってとこ。歩いて二十分くらいだと思うけどタクシーだとすぐだから」

次の言葉を準備しようと大きく息を吸い込んだとき「プチ」と電話は切れた。「なんなのよ」私はすかさずリダイヤルしたが呼出音しか聞こえなくなってしまうた。

また沸々と怒りがこみ上げてきていた。「いつもコレじゃん」腑に落ちぬまま振り回される。さつきまでのくつろぎ感は一瞬で消えた。しかし私は急いで出発しようとしていた。

相模三川公園は気持ちのいい風が吹いている相模川沿いに作られた新しい公園だった。私はまた妹に電話すると「着いた」と告げた。

「そのまま相模川沿いに歩いてきて」妹は言った。少し歩くと川を背に手を振っている妹らしき姿が見えた。私は母ちゃんのゲージをしつかりとにぎり直し走りだしていた。

走っているつもりなのに妹のところまでなかなか到着できないもどかしさがあった。でも妹が母ちゃんを抱っこしているのが確認できると私は一段と加速し、もう声が届くだろうと思われる時点で「母ちゃん！」と呼びかけた。母ちゃんは猫用リードをつけていて、私の呼びかけに目を細めて短く「にゃ」と言った。

私はハアハアと喘ぎながら「母ちゃんを返してよ」と妹に詰めよった。妹は微笑みながら「お姉ちゃん、こいこいこいよね」と状況をまるで無視した能天気な

返答をした。

私は母ちゃんの無事な姿に安堵しつつ、「そんなのどうでもいいのよ。あんだが家を出ようが何しようがどうでもいいのよ。でもなんで母ちゃんを連れ出したのよ」「早くでまわしたてた。妹はいつも通りの落ち着いた態度だった。

「お姉ちゃん、覚えてる？ババがさ、小さい頃川に連れて来てくれたよね。あれってさ、たぶん相模川だよな？」仕事で忙しかった父だが、私にも父と川で遊んだ記憶があった。子供の私たちはそれがこの川かは分からなかったが、地理的におそらく相模川のだよかのポイントだろう。

「もちろんこじやないだろうけどさ、こんな景色だったよね」妹は続けた。私は気持ち良さそうにリラックスしている妹に妙な違和感を感じた。

「抱っこしてたら母ちゃん暑くて可哀想。ゲージに入れるからね」私は母ちゃんを奪還し、ゲージに押し込んだ。

「お姉ちゃん、母ちゃんはね。もうすぐ命が尽きるんだよ」妹がゆっくりとした口調で言った。

「何言ってるのよ、バカじゃない」私は高齢の母ちゃんの最期の時を想像するだけで涙腺がゆるむ。それを落ち着きはらって、いったい何を言い出すのだ。腹が立った。

「お姉ちゃん。お姉ちゃんは信じられないだろうけど、ほんとなんだ。あたしにはね、分かるんだ。昔からあたし、不思議なことが分かるみたい」妹は小さく息をはいいた。

「あたしね。命に関わることがなんとなく分かるの。それでその時の思いが分かるんだ。母ちゃんはね、川のをばに行きたいんだって。お母さんに会いたいんだって」

私は呆然と立ちすくんでいた。普通ならこんな突拍子もない話、一笑にふすだろう。でもこの風変わりな妹の話は即座に否定できないものがあった。

「なんで川のをばなんかに行きたいのよ」私は問い詰めた。

「母ちゃんね。あたしが相模川で拾った子なんだよ」妹は続けた。

「お姉ちゃん。あたしね、ババが死ぬことも分かってた。でも誰にも言えずにすぐすぐ辛かった。ババが死んだ後もずっとずっと辛かった。もしかしたら助けられたんじゃないかなって。どうしようもなくなるとね、あたし一人で相模川に来ていた。ババが連れて行ってくれた場所を探し出したかった。色んなポイントに行ってみたよ。そのポイントが見つかればもしかしてババと会話できるかもって。ババに『ごめんさい』って言うことができた」妹は小さい子供のように泣きじゃくっていた。こんな妹を見るのは初めてだった。

突然のことに私は完全に言葉を失っていた。たださつき夢で見た妹の整列した菌型が頭に浮かんでいた。

「あんだ、お父さんの腕噛んだのって」思わず口走った。

「ババはね、あの時あたしたちに『戻してくれ』って強く訴えてたんだよ」「あたしって小さい頃噛みつき癖があったでしょ。ババはあたしに『あゆみ、思いつ

きり噛んでくれ』って言うてたんだよ」私は涙があふれた。「そんなの嘘だ」と否定する思いと「辻褄が合う」という思いで揺れていた。

「でもね、何度川に通ってもババの場所には分からなかった。ババと話は出来なかった。ある雨の日、ババは私を怒っているのかもって思ったら悲しくて悲しくて河原で泣いていた。そしたら草むらに横たわっている茶色い猫が見えた。近づいてみるとその子は虫の息で、あたしに『子ネコ』の存在を訴えてた。あたしは必死に草むらをかき分けて子猫を捜した。そして見つけたのが『母ちゃん』だよ」

妹はずぶ濡れで弱りきっている母ちゃんをバッグに入れ電車に乗って家に帰ったという。そして今母ちゃんの命はもうすぐ尽きるのだと言い、母ちゃんは相模川で自由になりたいのだと言う。

こんなに平和的な風景の中で、私は涙がとめどなくあふれていた。妹の話はシヨックだったが、妹にそのような能力があったとすれば数々の奇行の説明ができる気がした。

「分かったよ。分かったけどダメ。母ちゃんは家に連れて帰る。ぜつたいに！」私はきつぱりと言った。妹はしばらく沈黙した後「分かった。いいって。母ちゃんも帰るってよ」と言い、「じゃあね、お姉ちゃん。あたしはもうしばらく海老名で暮らすよ。母ちゃんのことよろしくね」いつもの妹の顔に戻っていた。

私は急に胸に湧き上がる奇妙な気持ちを感じた。たださつき夢で見た妹の整列した菌型が頭に浮かんでいた。

「あんだ、お父さんの腕噛んだのって」思わず口走った。

「ババはね、あの時あたしたちに『戻してくれ』って強く訴えてたんだよ」「あたしって小さい頃噛みつき癖があったでしょ。ババはあたしに『あゆみ、思いつ

のように姿勢良く歩いて行つた。私は涙で視界がかすんでいた。妹は歩きながら振り返らずに手を高く上げ「バイバイをした。私はしばらく川を見ていた。

「母ちゃん、帰ろっか」母ちゃんはまた短く「にゃ」と返事をした。

あの時、私は父を大声で呼びたかった。妹と同じように「ババ！」と叫んで抱きついたかった。

無事に家に戻った母ちゃんは、十日ほどたったある日、突然姿を消した。六日目の朝、泣きつかれて放心状態の私に「母ちゃんの気持ちを優先してあげなさい」と母が静かに言った。猫は死に場所を求めて家を出て行くという。そしてそれはきつと家族にその姿を見せたくないからではないかという。私は素直にうなずきたくはなかったが、頭の片隅では母の言うとおりでと思うていた。しかしそれからも半年くらいは、もしかしたら母ちゃんはどこかで凍えてひもじい思いをしているのではないか、など不安と恐怖で心が痛み、枕を濡らす夜もあった。それでも一年が経つ頃になると少しずつ気持ちの整理ができるようになっていた。そしてそんな頃、音信不通だった妹から荷物が届いたのだ。

箱を開けると、手紙と一緒に母のワインと海老名の地酒があらわれた。手紙には「今日は母ちゃんが天国のお母さんに会えた記念日です。ママと乾杯してね」とあった。

「母ちゃんの命日って今日なのかな？それともあの子が発送した日かな？」私が気にしていると、母は「そんなの分かりっこないでしょ。適当なこと言ってるのよ」と笑った。

私は猫の足あとマークの額に入った母ちゃんの写真と、シルバーのシンプルな額に入った父の写真をテーブルに置くと、母のワインと海老名の地酒をそれぞれグラスにそそぎ、母を座らせた。

「あらあ、ずいぶん雰囲気だすじゃない」母がからかった。

私は母のワインのグラスを母ちゃんの写真にコツンと合わせ、海老名の地酒を父の写真の前に置いた。

「母ちゃんとババに乾杯」母のワインは甘くて切ない、海老名の地酒はキリリと爽やかな味がした。

「海老名って地ビールはないのかしら？」と楽しそうにつぶやいた。

小説部門 選評

岡崎 満義
(元文藝春秋編集長)

靈感能力のある、ちよつと変わり者の妹のんびりと大らかな母の間にあって、きりきり舞いする律義な私――性格のちがった家族三人がくりひろげる、何気ない日常のひと駒が、実に巧みにすくいとられている。かつて、死の間際にある父の腕に、菌型がつくほど、噛みついた妹は、十五年後の今、その直後に拾ってきた野良猫「母ちゃん」つれて家出してしまった。いつも妹のエキセントリックな行動にふりまわされている私は、やとと相模川のそばで妹に会い、「母ちゃん」を取り戻した。実はこの猫、父の死のあと、相模川の傍で拾ってきたもので、今年老いて死期の近いのが分って、もとの相模川の傍につれてきたのだと分った。

父の死に残された家族をつないだ猫「母ちゃん」というかけがえのない存在に対する、妹の哀切な気持が、姉の目を通してよく描かれている。最後に妹から「母ちゃん」のために母のワイン、父のために海老名の地酒が送られてきた場面も、つくりものめいた嫌味はなく、気持ちよく読めた。

三川公園、相模川、苺など、海老名市のシンボルも作品の中に上手に使われていて感心した。名所・旧跡であれ、日常的な風物であれ、こうした作品の中に取り上げて言葉で磨いていくことは、その町の歴史や生活に新しい光をあてることになるはずだ。(以下略)

入賞作品集をお配りしています。詳細は本紙3面をご覧ください。

